INSIGHT - 2024.8.27

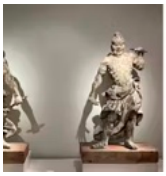
あとで読む

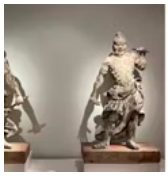
オランダ彫刻家が取り組む「仁王門プロジェクト」から考える、文化財保護の課題と可能性

オランダの彫刻家イッケ・ファン・ローンがアムステルダム国立美術館で仁王像（14世紀・作者不明）と出会ったことから始まった仁王像・仁王門にまつわる一連のプロジェクト。現在も続くこのプロジェクトが投げかける、文化財保護の課題と可能性を考える。

文＝貝谷若菜

アムステルダム国立美術館で展示された仁王像





2013年、オランダの彫刻家イッケ・ファン・ローン（Jikke van Loon）は、アムステルダム国立美術館で、仁王像（14世紀・作者不明）と出会った。美術館の壁に背を向けて展示されている仁王像を見て、彼女は「門番としての本来の役割を果たせていないのではないか」と感じた。その思いから、彼女は島根県奥出雲町横田の岩屋寺（いわやじ）の仁王門を訪ね、仁王像がいなくなったことで失われた繋がりや歴史を取り戻すべく、2018年に「Issho-ni／Tomo-ni」ブルーNio制作プロジェクト、そして2021年に「仁王門プロジェクト」を開始した。この個人的な探求と使命感から始まった仁王門プロジェクトは、紆余曲折を経て、日本の次世代に向けた地域の歴史、コミュニティー、そして文化財の持続的な保護に関して大きな問いを投げかけている。

イッケ・ファン・ローンと仁王像の図面
Photo by Erik Smits

彫刻家イッケ・ファン・ローンとは

ファン・ローンは、幼少期から自分とともに空間に存在するものに興味を抱いていた。彼女は1970年代にオランダでインテリア設計士の母のもとに生まれ育ち、家には畳が敷かれ、母の趣味は生け花だったという。幼い頃から、日本の文化様式や東洋哲学に無意識に触れていた彼女は、禅の輪に興味をもちな

がらも、西洋的な美の基準とは異なるそれが、なぜ美しいとされているのか理解できなかった。

　このような日常的な好奇心から、彼女は、ある文化では美しいとされるものが、別の国では異なるものが美しいとされることに強く惹かれるようになり、「美」という概念に深い興味を持った。その後、インド哲学を中心に東洋哲学への学びを深め、西洋と東洋が空間や物体、実体を通じて現実をどうとらえるかの違いを探求した。

　そんな彼女は、木炭や粘土などの自然素材を用いた彫刻が空間に与える圧倒的な存在感に魅了され、具象的な彫刻家としての制作活動を行ってきた。現在は、人間ではないモノや実態の寿命をコンセプトにした'Singing songs to stone'や暗闇という空間の存在をテーマに'Black'というパフォーマンス・シリーズにも取り組んでいる。彼女の代表作のひとつである《アントン・デ・コム》（2005）は、アムステルダム国立美術館のコレクションの一部である。

アムステルダム国立美術館で展示されたイッケ・ファン・ローン《アントン・デ・コム》（2005）
Erik Smits / Rijksmuseum

アムステルダムの仁王像・出雲町横田の仁王門との出会い

島根県奥出雲町横田の岩屋寺から来た高さ2メートル37センチの仁王像が、アムステルダム国立美術館で初めて公開されたのは2013年のことだった。この仁王像は、2007年に京都の古美術商から美術館のキュレーターによって購入され、翌年オランダへ運ばれた。しかし、美術館は当時、10年にわたる大規模改修の真っ只中で、仁王像は5年間収蔵庫に眠っていた。

仁王像は本来、日本の寺院の門である仁王門の両側に安置される守護神で、右側の口を開けて「アーアー」と叫ぶ「阿形（あぎょう）」と、左側の口を閉じて「ウン」と音を出す「吽形（うんぎょう）」から成る。サンスクリット語シッダーム文字において〈阿〉は口を開いて発する最初の字音であり、〈吽〉は口を閉じて発する最後の字音。そこからすべての音および万物の始源と終極を象徴するものとみなされている。

アムステルダム国立美術館で展示された仁王像

ファン・ローンが美術館で仁王像と初めて対面した際、強い違和感を覚えた。それは、彫刻が本来持つ力、すなわち観る者を動かし、遠ざけ、近づけ、そのまわりを歩き回らせるような「空間との対話」を感じられなかったから

だ。彼女はこう語る。「彫刻は、人々に動きを促し、領域に入る方法を探らせるもの。仁王像も非常に興味深く、印象的だったのに、どう動いていいのかわからず、彫刻にはもっと伝えたいことがあるはずなのに私に何を伝えようとしているのか理解できなかった」と。

本来、二体の間を通り抜けるように設計されているはずの仁王像が、三次元・四次元の存在感を失い、壁を背に「展示」される姿を見て、彼女はさらに違和感を覚えた。この空間で、仁王像はホワイト・キューブの中で制限され、まるで二次元の絵画のように見えたという。彼女は、間を通る人々のための入り口としての役割を果たすべき仁王像が、その背中を壁に向けて展示されている美術館の特定の空間では、その役割を果たすことができないのではないかと感じた。

公開から半年後の2013年10月13日、アムステルダム国立美術館は京都の大覚寺から20人の僧侶を招き、仁王像に再び魂を宿し、美術館が仁王像にとって安らかな居場所となることを願って「開眼供養式」を執り行った。

その後、15年にファン・ローンは、仁王像の故郷である横田の仁王門を訪問。手紙と自ら描いた仁王像の図面を携え、仁王様のかつての家に感謝の気持ちを伝えるためだった。

仁王門の前で手紙を読むファン・ローン

横田で彼女を待っていたのは、関係者以外立ち入り禁止の山中にある廃寺、岩屋寺だった。なんとか仁王門にたどり着いたものの、その門はすでにかなり痛んでいた。彼女はその前で手紙を読み始めた。すると、ひとりの村人の男性が現れ、「日本語に訳さなければ門は理解できないよ」と言いながら、彼女が手紙を読み終えるのを見守り、寺の参拝方法を教えてくれたという。その男性は役場の課長で、2017年に彼女を日本での制作活動に招待した。

2017年に数週間、横田のアーティスト・イン・レジデンスを訪れたファン・ローンはそこでアムステルダム国立美術館での開眼供養式のビデオを横田の人々に見せた。その際に、村の人々の仁王様に対する想いに触れ、彼女は横田のコミュニティと仁王門、仁王像のつながりを再び構築する必要があると感じたという。そこで、すでにアムステルダム国立美術館の所蔵品となった岩屋寺の仁王像を返還する以外の方法として考えついたのが、オランダの伝統工芸であるデルフト焼きの技術を用いて、540枚のタイルに等身大の仁王像を描き出すというものだった。この新たな仁王像は「ブルーNio」と呼ばれた。

Issho-ni／Tomo-ni（re-creating pure wisdom, together!）

2018年と2019年に再びファン・ローンは横田のアーティスト・イン・レジデンスに招待され、ブルーNioを制作。このプロジェクトは「Issho-ni／Tomo-ni（re-creating pure wisdom, together!）」と名付けられた。アムステルダム国立美術館に行ってしまった仁王像の魂、その歴史と精神を横田に受け継ぐための新たな仁王像を国境や地域差を超えて「一緒に共に」制作し、納めることが目的だった。

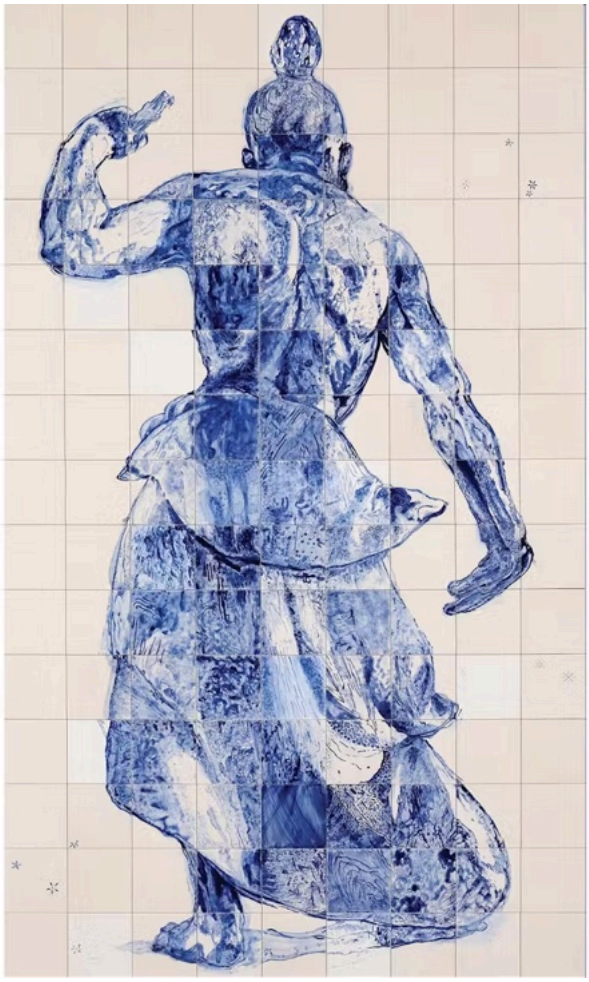
アムステルダムと奥出雲の住民合わせて約400人がこの絵付けに参加した。木像制作の経験を持つファン・ローンは、本物そっくりの仁王像をつくることもできたが、彼女にとって重要だったのは、仁王像の故郷である日本と新たな住まいであるオランダの人々がともに仁王像を通じて関わり合い、歴史を紡ぐことだった。

仁王像を描くファン・ローン

絵付け中のタイル

絵付けに参加する住民

オランダでの絵付けワークショップの様子



絵付けに参加した住民とブルーNio

19年には、阿形と吽形の前面と背面のタイル画が完成し、同年にはアムステルダム国立美術館のキュレーターも来日して村人たちと話し合いを行った。

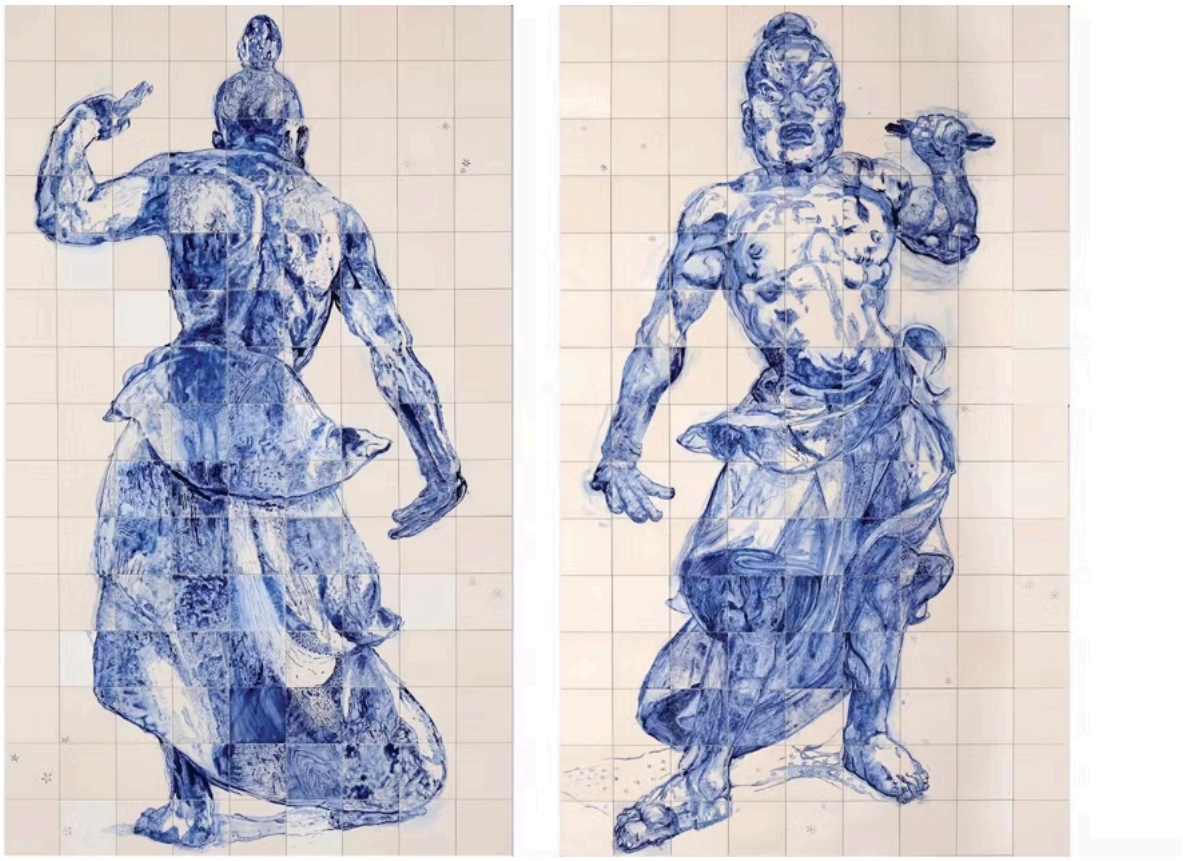
完成したブルーNioの設置は目前であったが、一筋縄ではいかなかった。仁王門の所有者の許可を得なければならなかったのだ。ファン・ローンと日本の協力者たちは、仁王門の所有者を探し始めた。困難な道のりだったが、彼女は最終的に仁王門を購入することに成功した。そこから、廃寺となり荒廃した仁王門の修繕・再建を目指したプロジェクトが始まった。

仁王門プロジェクト

21年に「仁王門プロジェクト」が開始し、23年には、仁王門全体の修繕・再建の方法を地元の大工と模索したが、仁王門の傷みがあまりにも深刻で、復元は現実的に困難と判断され、解体が避けられなくなった。

そして24年4月には仁王門の撤去が決まり、に地元の人々とともに魂抜きの儀式が行われた。この解体作業には京都建築専門学校の学生たちが卒業制作の一環として参加し、彼らがすべてのパーツを丁寧に取り出し、現在はその保存方法や再利用の可能性を模索している。

ファン・ローンは、この10年以上にわたる活動について振り返り、こう語る。「この活動は流動的で、最初から入念に設計されたものではありません。振り返ると、これまでの過程を通じて私たちはひとつのプロジェクトをつくり上げたように感じますが、その過程ではつねに疑問が生まれ、視点も変わっていきました。もともとは、ただ仁王門に行き、感謝を伝えるというシンプルな行動から始まりましたが、それが今日、国境を越えた多くの人々とのつながりの中で発展してきたのです」。彼女にとって、この一連の活動は個人的な探求心に導かれたものであり、答えや完成形のない実験的なアートプロジェクトなのだ。



ブルーNio

プロジェクトの向かう先

現在、数名の大工と京都建築専門学校の学生たちによって、仁王門の解体作業が進行中だ。ファン・ローンは再建を計画しているが、まだ多くの資金が必要であり、プロジェクトはつねに村人や政府、役人と共に進めていくため、予期せぬ出来事に対応することも少なくない。しかし、彼女にとってこれらの人々と共にプロジェクトを進めていくことが非常に重要だと強調している。

解体された仁王門のパーツの修復完了後、25年夏にかけて仁王門の再建を目指しており、仁王門プロジェクトは25年4月から10月まで開催される大阪・関西万博のオランダ王国館にて紹介される予定だ。

さらに、25年10月13日には、再建された仁王門にブルーNioを設置し、開眼供養式を行うことが目標となっている。10月13日は2013年にアムステルダム国立美術館で仁王像の開眼供養式が行われた日であり、その日を再び特別な日として記念する計画だ。

解体される仁王門

真正性の再考：日本とオランダの文化遺産保護における価値観の違い

ファン・ローンは、このプロジェクトを通じて、日本とオランダの文化的感覚や文化財保護に対する姿勢の違いを深く理解する機会を得たという。とくに印象に残っているのは、滋賀県大津市にある三井寺で仁王像の保存修復を行っている彫刻家を訪ねたときのことだ。彫刻家は、貝殻や金、漆などを用い、仁王像の険しい表情を再現しながら、守護神としての役割を取り戻す作業に取り組んでいた。

彼によると、伝統的な技術を使って、仁王像が本来の任務を果たせる状態に戻すことが「真正性」とされる。つまり、日本では修復や再建が行われても、その文化財が持つ役割や精神が受け継がれていれば、それも「本物」としての価値が認められる。例えば、伊勢神宮が定期的に建て替えられながらも、2000年前の建造物としての価値を保ち続けているのが、日本の考え方の一例だ。

いっぽう、オランダでは「オリジナル」の状態や最初の芸術家のタッチが重視される。真正性に対する考え方が、日本とはまったく異なるのだ。

この違いは、オランダの人々にとって非常に新しい概念であり、ファン・ローンにとっても遺産保護における「本物」の意味を改めて考えさせるものだっ

た。この経験を通じて、彼女は日本とオランダにおける文化遺産に対する価値観の違いに気づき、それが彼女のプロジェクトやアートへのアプローチに大きな影響を与えた。

つまり、「仁王像であること」の本質は、どれだけオリジナルに近いかではなく、その役割や精神性、関係性にあるのだと気づかされた。このようなコンセプトが彼女のブルーNioの制作という決断に影響を与えた。実物そっくりの木像の仁王像ではなく、ブルーNioという新たな形で現在進行形のプロジェクトに関わったすべての人々の繋がりを象徴している。

日本の遺産保護を再考する

現在、仁王門の再建に向けて関係者間で議論が活発に行われている。その論点は、どのように修復するか、そして「何を修復するか」である。再建される予定の仁王門は非常に古く、状態も良くない。また世界遺産に登録されるような歴史や景観美もない。では、歴史的・文化的価値を尊重しつつ、地域のアイデンティティに合った形、以前に近い形で修復されることが必要なのか、それとも、新しく美しい形に修復されるべきなのか。ここで問われているのは、外観なのか、コミュニティにおける役割なのか、何を修復するのかという点である。この門は未来への道を開くものであり、歴史と未来をつなぐための架け橋でなければならない。

ファン・ローンが個人的な探求と使命感から始めた仁王門プロジェクトは、単なる修復にとどまらず、仁王門を中心に築かれてきた歴史やコミュニティの現代的な再建を目指している。彼女が幼少期から抱いていた「自分とともに空間に存在するものや実在」との共存への関心が、この活動の原動力となっている。岩屋寺の仁王門を介してオランダ、日本、そして横田の住民の間に新たな繋がりが生まれ、コミュニティが形成され、いままさに新たな歴史が紡がれている。

しかし、ブルーNioの設置が完了した後、この仁王門の手入れや保護、そして歴史やコミュニティの持続は誰が担うのか。例えば、横田の人口は年々減少していて、現在は2500人に満たない。村の伝統文化や歴史的遺産を維持するための人手や資金が不足している現状に加え、このような状況では、地域コミュニティだけで遺産を保護し続けることは非常に困難である。

この現状は、日本全体における地域遺産保護の持続可能性に関する大きな問いを投げかけている。持続可能な遺産保護を実現するためには、地域固有のコミュニティが果たすべき役割が重要であると同時に、外部からの支援も不可欠である。地域固有のコミュニティだからこそ守り続けられる歴史や概念、知識や感情があるいっぽうで、横田のような小さな村が遺産を守り続けるには、国や県からの補助金、そして個人や団体からの寄付が必要である。

岩屋寺の仁王門のケースは、日本全体が遺産保護に対する姿勢や対応を問われる具体例となっている。今後の取り組みが、この地域の遺産保護の象徴となるだけでなく、ほかの地域における遺産保護活動のモデルケースとなることを期待したい。

また、この国際的でありながら地域の歴史とコミュニティに根付いたコラボレーションに、次の世代である学生が参加できたことは、遺産保護の観点から非常に意義深い。とくに、遺産保護に必要な技術を持つ専門家が減少するなかで、このような実践を通じた学びは学生の意欲にもつながり、将来的に彼らが新たな遺産保護の担い手となることが期待される。

このように、国外からの視点を取り入れることで国内の遺産の重要性に新たに気づくこともあり、この気づきを日本の遺産保護の未来に向けた教訓として活かしていくことが求められている。

Information

会期：
会場：
住所：
電話番号：
開館時間：
休館日：
料金：

編集部

あとで読む